
Collar

shibito

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Collar

【Nコード】

N9266Z

【作者名】

shibito

【あらすじ】

深夜のエレベーター。

裸の女に首輪をつけて散歩に出かける男と、乗り合わせた女。彼女は、夢とも妄想ともつかない世界に足を踏み入れる……。

午前零時のエレベーターで、私は凍りついていた。
箱の中には、私独りじゃなかった。

途中の階から乗り込んで来た男性が一緒だった。

年齢は、多分私と同じくらい、三十歳の手前つてところか。

黒の短髪。グレーのカッターシャツにベージュのチノパンって、
全くやる気を感じられない地味ファッションで、細身の眼鏡をかけている。

ご当人も細身で、背が高く、そして、端正な面差しをした、かなりのイケメン。少なくとも、私にはそう見えた。

無表情に、すっと立ってるだけの彼自身には、イケメンという以外にこれといった特徴もなく、おとなしく害もなさげで、何ら問題はない。

問題は、彼が連れているペットだった。

赤い革の首輪と、引き紐で繋がれている？それ？は、主人と同じく無表情で、身を低くしたまま動かない。

？それ？は、裸の女だった。

淡い、藁の色をした長い髪を、肩甲骨の辺りまで垂らし、黒く潤んだ瞳で、じっと虚空を見つめている。

鉤物を思わせるような白い肌をしていて、手足は長く、すらりと痩せぎすではあるけれど、おっぱいもお尻も案外豊かで、基本的な肉づきは、しっかりしている感じ。純粋な日本人ではないっぽい。

北欧とかロシアのような、寒い国の人とのハーフかクォーター。そんな印象だった。

裸で繋がれた？彼女？の、細面の綺麗な顔を上から凝視しているうちに、エレベーターは一階に着いた。

男性が歩き出し、引き紐で繋がれた？彼女？も、一緒に歩き始めた。当然のように、四つんばいになったままだった。

エレベーターからおりた私は、マンションを出て行く男性と、彼女？の後姿を、啞然として見送った。

コンビニでの買い物を終えて、マンション八階の部屋に帰ると、私は博也に、ことの顛末を話して聞かせた。

けれど、博也のリアクションは今一つだった。

ケータイ片手に、皿に盛ったコンビニのつくねを頬張りながら、ふうん、と生返事をした後で、

「なんか、そういうプレイだったんでしょ」

興味なさげにそう言ったきり、ケータイのモバイルゲームの世界へと、戻って行ってしまった。

私は博也の横に座って、角ばった肩にしなだれついた。

「七階から乗ってきた人なんだけどさ、見たことない顔だったから、最近引越してきた人じゃないかって。ほら、最近さあ、このマンションで子供の声聞かないじゃない？ あそこの家の人が引越して、その後に入ってきた人になって」

「ふうん」

博也は相変わらずの生返事をしてから、うるさそうに顔をしかめた。

私が肩から離れると、立ちあがってトイレに行った。

そのまま、洗面所で歯を磨き出す。

カウチにぼつんと取り残された私は、テーブルのつくねを見た。

博也が急に食べたいと言い出したから、慌てて買ってきたつくねだったけど、結局、一串の半分しか食べられていなかった。

「俺、もう寝るわ。明日早いんだ」

博也は居間を横切って、カウチ後ろの寝室へと向かった。

そのまま寝室の引き戸を閉めようとしたけど、私が顔をあげ、お

やすみのキスを待っているのに気づくと、ひょいっと首を伸ばし、歯磨き粉の匂いのキスを、唇にくれた。

居間で独りぼっちになった私は、博也の残したつくねを食べて、たれで汚れた指をしゃぶりながら、カウチの背にもたれかかった。白い天井を見あげていると、エレベーターでのが頭に浮かんだ。

深夜零時に、美しい女を犬のように首輪で繋ぎ、散歩に出かける男。

博也の言うように、特殊性癖を持った、変態さんなんだろう。あんなに格好いいのに。女の人も、あんなに綺麗だったのに。世間は広い。

今頃あの二人は、ひと気のない道を散歩しながら公園にでも行き、私なんかじゃ考えもよらないような、マニアックなアブノーマルプレイを、愉しんでいるのかもしれない。

まあそれはいいとして。そんな変態羞恥プレイを始めようとしていた矢先に、彼らは、同じマンションの住人である私と、期せずして遭遇してしまったわけで。私が彼らを見たように、彼らだって、私の姿を見ていたはずだ。

その事実、彼らの中で、どのように処理されているのだろうか？
男はどう考えたのだろうか？ あんな姿を見られた、女の気持ちは？

私にはなぜか、あの二人が、私を嘲笑っているように思われていなかった。

二人の姿に、呆然と見入っていた私の阿呆面を馬鹿にしながら、あの二人にしかわからない、猟奇的な快楽に耽っているような。

その想像は、奇妙に私を興奮させた。

何でだか、自分でもよくわからない。

股間の中心部が、じわじわと熱くなってきた。

ルームパンツの股座を、私はもぞもぞと弄り始めていた。
湿り気を帯びたそこからは、干からびたクリームシチューの皿に
も似た匂いが立ちのぼった。

長袖Tシャツをまくりあげて、乳首をつまんでみる。

軀の中心にまで届くようなむず痒い快感。と同時に、鈍い痛みも
感じる。そろそろ生理が来るんだろう。あそこがやけに疼くのも、
きつとそのせいだ。

乳首をくりくりとつまみながら、パンツの中に手を入れて、割れ
目を直に弄った。

陰唇はすでにぬめぬめしていて、指先をふやかすようだった。
勝手に沈み込むその指先で、奥の入り口を強めに押さえれば、そ
こは、どくんどくと脈打っていて、胎動しているような蠢き方が、
なんだかおぞましいほどだった。

ちよつと迷ってから、私はその疼いている場所に、指を一本潜り
込ませた。

充実感から、お風呂に浸かった時のようなため息が漏れた。
けれども、指に粘膜の絡みつく、ぐにやぐにやとした感触は、や
っぱり気色が悪い。

さっさと済ませてしまおうべく、私は不自由なパンツの中で、素早
く指を抜き挿しさせた。

硬くなったクリトリスを、空いた指で揉み込んだ。

もう一方の手でおっぱいを撫で廻す。

呼吸が荒くなってきた。

あそこもどんだん濡れてくる。

ああ、でも駄目。

あと一步のところで、いききれない。何か足りない。

こんな時には、ケータイでエロ動画でも探すってのがパターンだ

けど、今は両手が塞がっている。

だったらエッチな想像か。

かといって、博也と初めてホテルに行った時の思い出とかは、使い古してもはやなんも感じなくなっている。ポルノ小説等のシチュエーションも然り。

だったらやっぱ、あれしかない。私は、さっきの変態カップルのことを思い出し、妄想することにした。

男の端整な横顔や、全裸に首輪だけを着け、引き紐で繋がれ、四つん這いで歩かされていた女の、ぷりぷりと揺れるお尻なんかを頭に思い浮かべ、そのアブノーマルさで欲情を煽ろうと努力した。

あ、ちよつといい感じ。

パンツを脱いで、もうちよつと脚を大きく広げてみよう。

これで指が自由に動く。もつといやらしく、激しく動かせば……ああ。

待ち望んだ感覚が迫ってきた刹那、私の脳裏には、奇妙な映像が浮かんでいた。

それは、全裸で首輪を着けられた、私の姿だった。私は深夜の公園で、犬のチンチンのポーズを取っていた。

がに股になってしゃがみ、両手の拳を前に差し出して、飼い主に媚びへつらうような、だらしない笑みさえも浮かべていた。

ぱかっと広げた股座の中心で、丸見えになった性器も割れきっていて、黒く広がった穴ぼこからは、水飴みたいな体液が、糸を引いて垂れ落ちて。

そんな、自らの痴態のイメージとともに、私は果てた。寝室で寝ている博也を気にして、声を押し殺しながらだったせいか、その絶頂はゆるゆると、いつまでも私の性器を震わせ続けて、治まらない。震え続ける穴からは、熱を持った粘液が湧いて溢れ、差し挿れた指の股まで、じつとりとぬめらせた。

その翌日は金曜日で、会社から帰ると、私は独りきりだった。週末になると、博也は横浜の実家に戻る。

平日、博也が私の部屋に寝泊りしているのは、彼の職場へ行くのに、私の部屋からの方が便利だからだ。

それで世に言う、半同棲状態ってやつになっているのだけど、住民票も何もかも、彼は実家に置いたままなのだ。

もう付き合って三年にもなるってのにこの状態で、ご両親と挨拶なんかもしていない。当然、結婚話の気配もない。

もともと結婚の方は、私もあまり興味はなかった。

親が結婚生活に失敗しているのを見て育ったせいかな、私の中で、結婚は不幸の象徴のようになっていたのだ。

「誰のおかげで飯が食えると思ってるんだ」なんて男に言われながら毎日を過ごすなんてこと、私はまっぴら御免だと思う。そして博也は、私のそんなところが都合良くて付き合っているのだろう。

シャワーを浴びてから、私は独り、パソコンの動画を適当に流しながら、発泡酒を煽っていた。

そろそろ日も変わろうって時刻なのに、ケータイに博也からのメールはなかった。

一緒に居ない週末は、最低限おやすみメールだけはするって、別に、決まりになってるわけでもなかったけれど、でも、当然のようにスルーされるのは、やっぱり寂しい。

私からメールすれば良さそうなんだけど、私の方からのメールに対し、たいがい彼は素っ気ないし、そもそも返事が来るとも限らないので、あまりしたくない。

寂しさを忘れるべく、缶に残った発泡酒を一気に飲み干し、次のを開けようと思ったら、もうなくなっていた。

コンビニへ向かうべく、私は部屋を出た。

ゆうべのことを思い出し、また出くわしたりして、まさかね、なんて、考えながらエレベーターに乗り込んだら、またも七階で止まった。

そして、今夜もまた、彼は現れたのだった。

ゆうべ鉢合わせて、すでに顔見知りになっっているからか、今夜の彼は、ちよびつとだけ愛想が良かった。上品な会釈に加え、「こんばんは」と、バリトンのいい声で挨拶までしてくれた。

私の方はいえ、*「あ、どうも」*とかなんとか、へどもど口ごもるばかり。みつともないったらありやしない。

けど仕方ないのだ。私は、彼の連れている？ペット？の方に、気を取られていたから。

？ペット？が、ゆうべの時とは、別人になっていたのだ。

今夜の？ペット？は、かなり小柄な、若い子だった。

下手をすると、高校生ぐらいかもしれない。

ウェーブのかかった柔らかなセミロングを、高い位置でツインテールにして、おでこを出している。

小さくて丸っこい顔に、黒くつぶらな瞳は斜視気味で、どこを見ているのかわからない感じが、退廃的な白痴美を演出しているように、コケティッシュだ。

マルチーズを彷彿とさせるような、可憐な雰囲気を持っているけど、彼女はマルチーズなんかじゃない。人間の女だ。

ピンク色の、ラメが入った首輪をつけてる？彼女？をガン見していると、彼女は、物凄い眼で私を睨み返してきた。なんだか、口の中でぶつぶつと文句も言ってるみたい。

「ミイ、怖がらなくても大丈夫だよ。この人は大丈夫」

男が、穏やかな声で彼女を、？ミイ？をなだめた。ミイは私を睨みつつ、男の足元に、おちょこ程度の小ぶりなおっぱいを押しつけ

るようにして、身を縮込めた。

「お散歩ですかあ？ 大変ですねえ」

男を見あげ、やたらと張った声で私は言った。そんなことを言うつもりはなかったのに、口が勝手に喋ってしまった感じ。お酒が入っていたせいだろうか。

男は、私のちよつと不躰な言い様にも、さほど頓着する様子を見せず、唇の端をあげて微笑んだ。

「これも、飼い主の務めですからね。私の仕事の都合で、こんな夜中になってしまうのが、この子にもご近所にも申し訳ないんですが」

ははあ、飼い主の務め、と来た。

私は、男の肝の太さに感心しつつも、そのふてぶてしい態度に、なんとなく苛立った。

こいつは、私にこんなところを見られたつてのに、全く堪えちゃいないんだ。

私が女だから、こんな、寝巻きにすっぴんのしょぼい姿だから、舐めきつて馬鹿にしてるんだ。

そんな風に考えを発展させて、勝手にむしゃくしゃしていると、エレベーターは一階に着いた。

男はミイの引き紐を引いて、さっさと先に行ってしまう。

私も、後に続いてマンションを出た。男は、駅やコンビニのある方向とは反対の、街灯の少ない、暗い住宅街の奥へと続く道に向かつて行った。

私はコンビニ二方面への道を数歩ばかり歩いたけれど、ふとその足を止めて、廻れ右をした。

振り返った先は暗闇に沈んで、もう男の影形も失われていた。

こっちの道を、私はよく知らない。

こっちには店も何もないし、行くことなんてなかったから。

けれど私は、躊躇なく男の後を追った。
彼がどこに、どんな散歩をしに行くのか、知りたいと思ったからだ。

幸い、少ないとはいえ街灯が全くないわけでもなく、男もさほど早足で歩いてはいなかった。

ぽつん、ぽつんと点在して続いている明かりのもとに、男の背中がぼっと現れる。

それを追って、暗い夜道を私は歩いた。

どれくらいの道のりを、歩いて行っただろうか？

闇の中から浮かびあがってきたかのような、ぼんやりと薄明るい公園が、眼の前にあった。

いくつもの電灯に包まれたそこは、滑り台やらジャングルジムやらブランコやら、一通りの遊具の揃った、小さいながらもそれなりの児童公園だった。

私は、入り口から園内を見渡した。

遊具を取り囲むようにして、ベンチがいくつか並んでいるのだが、その一つに、男は座っていた。

男の前には、地べたに膝をついたミイがいて、男の股に顔を埋めていた。

まるで、男にひざまずき、フェラチオのサービスをしている姿みたいだと思ったけれど、よくよく見れば、どうもそのものずばりだったようだ。

男は、ズボンのチャックだけをおろし、おちんちんを出して、それをミイに舐めさせていたのだ。

公園の入り口で立ち尽くした私を、男は遠くからじっと見つめていた。

眼鏡越しの視線に誘い込まれたかのように、私は、男のそばまで

歩いて行った。

近くで見ると、ミイのフェラチオは、ちょっとばかり変わっていた。

口に含んで、頭を前後に振るっていう、口を女性器代わりに使う例のやり方ではなくて、突き出したおちんちんに舌を這わせて、ひたすら舐めまくるだけなのだ。

まあ、なるほど考えてみれば、ミイは犬なのだから、人間とおんなじフェラチオじゃあ、様にならないのかもしれない。

犬なら、口の中にものを含めば嚙んでしまっただろうし、こうやって、キャンディーを舐めるように舌を使って奉仕するのが、自然なやり方なのだろう。

それにしても、こうして桃色のぬらぬらした舌を軟体動物のように蠢かせ、おちんちに這い廻らせる仕草というのは、こつこつとエロチックなものなのかと、感心に堪えない気持ちだ。

シロップ漬けになったような紅いおちんちは、電灯の光を照り返してぬめり輝き、芸術的なラインを描いて反り返って脈動しているし、そこに唇を寄せたミイの、とろりと陶醉しきった表情がこれまたセクシーで、悩ましいことこの上なかった。

屋外で、こんなに淫らなことをしている男が、おちんちんの方こそぎんぎんに勃起させているにも関わらず、その顔は平然と、すうっと涼しげな表情のままできているところも、ツボに入った。

私は昔から、机の下で秘書に御奉仕させながら、平然と仕事をこなすイケメン社長とか、そういうシチュエーションに、弱かったのだ。

私の萌えシチュの話はさておき、男はミイにおちんちんを舐めさせる一方で、私のことを、静かに見つめ続けていた。

下半身の昂ぶりが嘘のように、伶俐な瞳が、白く光る眼鏡を透かして、私の全身に注がれている。

そう、彼の瞳は、私の表面を　同じマンションの、顔見知りの住人という私ではなく、私の身なりや、顔つき躰つきといった、上辺の情報をのみを得ようとしていた。間違いなく。

それは、寒々とした凄みに満ちた眼差しだった。

そうして、私を生きた人間ではない単なる立体物、オブジェとして捉えることにより、逆に、私という存在の本質を洗い出そうとするかのような。

そんな、画家が、描く対象物に送るような眼差しを前にして、私には何も為す術がなかった。

強い視線に絡め取られて、身動きすらもままならなかった。

眼力とは、こういうもののことを言うのかと、独りで納得していると、唐突にその金縛りが解かれた。

男が私を観察することを、やめたからだった。

「野良か」

まず男が言ったのは、その一言だった。

その声に、私は背筋がぞくつとなった。

変わっていたのだ。

さつき、エレベーターの中で聞いた男の声とは、別人だった。

今の彼は、東京の端っこにある、家賃八万ちよつと、1LDKの古いマンションで慎ましかな暮らしをしている小市民なんかじゃない。

帝王だった。

いや、あるいは魔王なのかもしれない。

とにかくそんな、威厳と傲慢と、高貴さに満ちて、深夜の公園に君臨しているのだった。

男は、片手をミイの後ろ頭に宛がっていたが、引き紐を掴んでいるもつ一方の手をあげて、私を指し示し、そして言った。

「何だ、物欲しそうな顔をして。餌が欲しいのか？」

一瞬の間を置き、それが私に対しての台詞だと気づいた。

言葉で辱められている……。

そう思ったとたん、私は、全身の血が逆流するのを自覚した。

心臓の鼓動が喉もとまで伝わり、頭のとっぺんからオーブンに突っ込まれたように、かつ顔が熱くなっていた。

それが怒りなのか、それとも、それとは違った何かの感情なのか、自分でもわかりかねた。

言い返す言葉すらも失い、ただ熱を持って震えているだけの私に向かい、男は続けた。

「餌が欲しけりや、何か芸でもやって見せろ。面白ければ、余りものぐらいは恵んでやってもいい。こいつの後になるだろうけどな」
ミイの後ろ頭を撫ぜながら、男は言った。

馬鹿にして。

ふざけんな。

興奮の余り、眼の前が暗くなった。

息が苦しくなり、足元も覚束なくなった。

そして……性器の内側にどくどくと血が集まり、ブラジャーの中では、乳首が、乳輪ごと勃起して、硬く尖っているのを感じた。

私は着ていた長袖Ｔシャツを脱ぎ捨て、ブラジャーもむしり取った。

尖りきった乳首が、ひんやりとした夜気に嬲られ、おっぱいにさつと鳥肌が立った。

黙って見ている男の前で、ジャージのパンツにも手をかけた。中の下着ごとずりおろして、放り投げた。

足首から引き抜く時に、フラットシューズが片方足先から抜け落ちたので、ついでにもう片方も脱いでしまった。

全裸の上に、裸足にもなった私は、全く何も身に着けていない、生まれたままの姿となって立っていた。

髪もおろしたままで、マニキュアすらも塗っていないから、本当に、完全なる素っ裸だった。

人を見ている前で、ここまで丸裸になるのは、どれくらいぶりのだろう？

小学校、いや、幼稚園の時以来かもわからない。

これだけ無防備な姿を晒しているにも関わらず、開放感からか、私の中には、変な全能感が溢れつつあった。

私は軽く足を開き、両手を広げて、夜の空気を深呼吸した。

「ふん。そんなものを見せるだけしか、芸がないのか。役立たずの野良め」

男の声が私を嘲弄した。

目線を落とせば、ミイがおちんちんを舐めながら、半分だけ振り返り、私の裸体に、冷めた視線を送っていた。

その瞳が、私の目線とかち合った。

胸の中で、闘争心が燃えあがる。こんなちんちくりんなんに、負けたくない。

私は男のすぐ眼の前まで歩み寄り、ミイの躰を、足で押しのけた。
「何すんだてめえ」

ミイは愛らしい外見に似合わない、下品な罵声を浴びせて来た。そのまま、私に掴みかかろうと細い腕を伸ばして来たが、それは男の手に軽く遮られた。

男と私は、至近距離で見つめ合った。

男の刺すような視線は、私の肌を突き破り、はらわたをえぐって、脊椎にまで響いてくるかのようにだった。

体は熱くなるのに、なぜかぞくぞくと、産毛が逆立ちもした。肉体を凝視されると、それはいつそう激しくなった。

おっぱいを、あそこを、この視線から遮りたい。いや、やっぱり遮りたくない。

相反する衝動に揺さぶられ、足元がふらついた。

それに耐えて、私は片足をベンチに乗つけた。

男の膝をまたぐように。男に、私の？女？を見せびらかすように。股が開いたことで、私のあそこの部分も、ぱくつと割れて、中身を露出したようだった。

ぬかるんだ粘膜に、空気が直接触れる感覚。

そうして、私は男を見おろした。

男は、私のそこに眼をやった。

相変わらずの冷たい視線。

けれども、唾液に濡れ光るおちんちんの方は、さらに大きくなった気がした。

赤銅色に、血管を浮き立たせながら、脈動しているその姿。

私は、またもぞくぞくと身震いをする。

もう、我慢の限界だった。

私はベンチに乗つると、今度こそ本当に男の膝をまたいで、がに股になった。

男の両肩に手を置いて、お尻をももぞ振りながら、おちんちんを、濡れたびらびらの中に誘い込む。弾力のある亀頭部分が、上手く入り口に打ち当たったところで、勢いよく腰を沈めた。

ぐぐつと、膣の穴を割って這入ってくる衝撃は、お腹の底を貫いてから、脳天を突き抜けて行った。

ものすごい圧迫感。

ぎちぎちと、軋みながら中を満たしてゆくそれを、快感と呼んでいいのかどうか、私には判断つきかねた。

凄い。とにかく凄いとしか、言い様がないのだ。

興奮に息を弾ませながら、足を踏ん張って体勢を整えると、腰を上下に揺さぶり始めた。

こんな、座位とか騎乗位といった、いわゆる女性上位とするやり方、私にはお手のものだった。

物ぐさな博也が、自分が苦勞して動かなくてもいい女性上位を好むからだ。

おかげ様で、私の下半身の筋肉は、結構鍛えられていた。もつとも最近じゃあ、博也は、私がまたがってもなお、やってくれないことが多くなっていたけれど。

そんなわけで、セックス自体が久々だったこともあるけれど、本当に、この、硬いものが中で暴れ廻ってるような感覚って、本当に凄くて、内臓にまで響くみたいで、その上なんだかこの形、博也と全然違って、気持ちのいい場所を根こそぎえぐってくる感じで、もう全部に擦りつけたい一心で、お尻が勝手に動いちゃう。

凶暴なまでに、ベンチごとがたがた揺さぶりながら、男の股間にあそこを、おまんこを擦りつけるもんだから、男のズボンのファスナー周りは、私のおまんこ汁で、ぬるぬるになっているようだった。「がつつきやがって、この野良め」

舌打ちとともに、男は言った。忌々しげなその口調からは、セックスに陶酔している気配が、全く感じられない。

息も乱さず、私の臍に手で触れようとさえせずに、おちんちんだけで、私を姦してよがらせている男が憎らしくて、私はよりいっそう、男の股間におまんこを擦りつけるのだった。

私のこの動きで、男も気持ちよくなって、射精すればいいのにと、もう後先のことなど考えずにひたすらお尻を振り立てるうちに、だ

んだん、私のほうが辛抱堪らない感じになってきて、おまんこの奥がざわわしてきて、このままじゃ駄目、いっちゃいそうってなつて、悔しいから我慢しようとするんだけど、我慢できなくて、お尻の動きも激しくなつて、エッチな喘ぎ声まで出てきちゃって、それでもおちんちんはのつたりと、満腹の蛇のように、膨れあがつて緩慢で、焦らすみたいに、私の中、駄目、ああ、もう駄目、駄目。

蕩けるような慄きが、内から外に向かって駆けおりるように、私は男を咀嚼しながら、快感の頂点を極めてしまった。

甘い痙攣を支える硬い勃起は、私の褰の折り目の中まで丹念にしていって、そこに潜んだ悦楽の蜜を、余すことなく掘り起こしてゆくようだった。

これが自分の出したものとは信じられないような、淫靡な情感に満ちた声を辺りに響かせながら、私はおまんこを中心に、全身を、びくんびくんと震えさせた。

こんなに充実した、完全なる絶頂を迎えたのは、オナニー以外では、これが始めてかもと思った。

絶頂の波がゆるゆると続いてゆく中で、背後から脇腹を掴まれ、引つ張られた。怒り心頭のミイが、男から私を引き離したのだ。

為す術もなく男の膝から落つこちた私は、ベンチの足元にひっくり返り、がに股のまま、ぼんやりと夜空を見あげた。

だらしなく全てを投げ出し、ただおまんこだけをひくつかせた私の傍らで、ミイはそ知らぬ顔をして、男に媚びた視線を送っているようだ。

男が、ベンチから立ちあがった。

すらりと立った男に視線を移すと、彼は、ミイの引き紐を握ったままだった。

おちんちんも、私の汁でどろどろに汚れていたけれど、がちんが

ちんに勃起したままで、亀頭の割れ目からは、彼自身の先走り汁が、糸を引いて地面に垂れ落ちようとしていた。

もったいない、とばかりに、ミイが男の出したものを舐め取ろうとする。

彼女の、ツインテールの頭を撫でて、男は言った。

「ミイ、いい子だね。お前のあそこ、使わせてくれ」

男の呼びかけに、ミイは甲高い声をあげた。

悲鳴のようにもきこえるそれは、耳に障ったけれど、紛うことない歓喜の声ではあるようだった。

男は、ミイで埒を明けるつもりなのか。

私は上半身を起こした。ミイと男のナニを、見てやろうと思ったのだ。

私の見ている前で、男は着ていたカットソーシャツをはらりと脱いで、ズボンもおろし始めた。

露わになった肢体には、無駄な贅肉などまるでなく、かといって無駄に筋肉をつけているわけでもない。

ファッション雑誌か少女マンガでしかお目にかかれないような、嘘臭いほど均整の取れた美しい裸体に、私は見惚れた。

この躰と、たった今まで繋がっていたのだという事実には現実味が湧かなくて、なんとも不思議な気持ちでした。

そして、男の足元では、ミイが何やら準備を始めているようだった。

こちらに背を向け、肩をすくめ、まるで泣いてでもいるかのようには顔を伏せて手で覆い、いったい何が始まるのかと眼を凝らしていたら、彼女はこちらを振り返った。

それを見て、私は叫び出しそうになった。

ミイの右眼から、眼球が消えうせていたのだ。

眼球の輝きを失った眼窩は、遠目で見る限りは気持ちへこんでいる程度で、それほどグロテスクでもなかったけれど、でもそれでも左眼と比べれば、その違いは明らかだった。

彼女の手の平には、小さく光る貝殻にも似た、おそらくは、義眼だと思われるものが乗っていた。

そして、ああ、そして。

義眼を外したミイが顎をあげると、全裸の男がその前に立った。僅かに膝を折り、ミイの顔の、新しく開いた部分に、あの凶暴なものを宛がって……ツインテールの後ろ頭をぐっと押さえて、そのまま、押し込めるように……。

見ていることに耐えられなくなった私は、二人から顔を背け、硬く眼を閉ざした。

セックスの余韻など、躰から吹き飛んでしまった。

これは、単なる変態のレベルじゃない。

あまりにも異常過ぎる。

まさしく、人間をおもちゃにしているとしか思えない、流神行為とも言うべきものだった。

おぞましさに、胃の中が冷たくなる気がした。

それでいて、逃げ出そうにも立ちあがる力が湧かないのだ。

ただその場にうずくまるしかない私だったが、ふと、不穏な気配を感じた気がして、公園の入り口に眼をやった。

暗がりの中、電灯のスポットライトを浴びた人影が立っていた。

深いボルドーのVネックワンピースを上品に着こなした、長身で痩せぎすな、若い女。

すんなりと細くて長い首。その、限りなく薄い色の金髪と、細面の顔には、見覚えがあった。

彼女は、昨夜男が連れていた、あの女だった。

着衣だとかかなり印象が変わるけれど、見間違いはしない。

彼女は、私などには眼もくれず、私の背後で、ぞっとするような変態行為に耽っている二人を、昨夜と変わらない、黒く潤んだ瞳で見つめていた。

その瞳から、大粒の涙がこぼれた。

後から後から溢れ出し、蒼白な頬を伝って胸元へ落ちてゆく涙のしずくは、電灯の明かりを照り返してきらきらと、まるでダイヤのように輝いていた。

野良にしくはない、美しい彼女の泣き濡れる姿は、映画のワンシーンにしても遜色のないように思えた。

どうせなら、ゆうべのうちに男の後をつけりや良かったと、私は変な後悔をした。

あの夜が明けて、嘘のように平凡な日々が続いた。

知らないうちに、男は引越しをして居なくなっていた。

ペット禁止のマンションなのに、勝手に犬を飼っていたことがばれて、大家から追ん出されたのだと、エレベーターで乗り合わせた顔見知りのおばさんから聞いた。

そういえば、夜中に散歩に出かけるのを見たことがありました、って私が言つと、あたしもだ、っておばさんは頷いた。

鳴き声も何度か聞いたと言いつつ、おばさんは七階でおりて行った。

それはそれとして。私と博也の間柄には、ちょっとした変化が起きていた。

つい先日ことだ。

水曜日はノー残業デーってことで、二人とも早目に帰宅したので一緒に晩ご飯を食べていたら、博也が急にプロポーズをして来たの

だ。

なんでも最近、親戚が立て続けに結婚したので、博也のお母さんが羨ましがっているのだそう。

それで、彼自身は結婚なんて特に考えてはいなかったけど、私となら気心も知れているし、何とかなりそうかな、と踏んだらしい。今すぐには言わずとも、とりあえず婚約だけでもしたら母親も納得すると思うから。

博也はそう言った。お前さえ嫌じゃなければけど、と、つけ加えて。

私はといえば、自分でも意外なことに、博也からのプロポーズの台詞を聞いて、泣き出してしまったのだった。

結婚というものに憧れなんて抱いてはいなかったはずだし、家庭というものが、怖ろしくて薄ら寒い場所だって認識は、今も頑として私の中にあるはずなのに。

泣きながら、博也の肩に額を寄せる一方で、私は考えていた。

きっと私、本当は結婚が嬉しいんじゃないんだ。結婚っていう形で博也に選ばれること、そのものに感動してるんだ。

正直なところ、近頃の私達は倦怠ムードで、いつ別れてもおかしくない状態だと思っていた。

惰性で一緒に過ごしているだけで、何か、例えば大きな喧嘩とか、そういうきっかけがあれば多分、博也は実家に戻ったきり、帰って来なくなるんだろうな。

今はそばに居てくれるけど、いつかは必ず居なくなってしまう人。

そう思って、半ば諦めていた博也が、ずっと私と一緒に居ると言ってくれた。

たとえそれが、母親に促されて仕方なく決めたことであつたとしても、それでも私は嬉しかったのだ。

そして今夜、博也は私のために、婚約指輪を持って来てくれるのだ。

それは博也のお母さん、いや、もう私のお義母さんとも呼ぶべきなのか？

とにかく、博也の母親が婚約時に貰った、ダイヤの婚約指輪なのだった。

もちろん古いものだし、サイズだって違うのだから、一度頂いてから改めてリフォームするのだけれど。

ちなみに、リフォーム代は彼と私で折半することになりそうだ。そんな婚約指輪って聞いたことないけど、それでも、博也が私にプレゼントをくれるんなら、滅多にないことだから、そんなんでもやはり、嬉しいことには違いない。

とっとと仕事を切りあげて帰宅し、うきうきしながら、普段よりも気合を入れて夕飯の仕度をして、私は博也の帰りを待った。

博也は、夕飯ができてから二時間ばかり経ってから帰って来た。つまり、今から帰るってメールを送って来てから、三時間以上は経っていることになる。

博也は、職場で飲みに誘われて断れなかったとぶっきらぼうに言うのと、私に紙袋を放って寄こした。

「飯はいい。疲れたし、もう寝るわ」

酒臭い息とともに、そんな捨て台詞だけを残し、博也はさっさと寝室にさがってしまった。

私は、ご馳走を並べたローテーブルの前に独りで座り、博也に渡された紙袋を開けた。

指輪が入っているにしては大き過ぎる紙袋の中には、これもまた、指輪のケースにしてはいやに大きい、青いベルベット貼りの平たい箱が入っていた。

私は箱を開けてみた。

箱の中には、黒い革の首輪と引き紐が、綺麗に並べてしまっ

った。

首輪には、予想していたよりもずっと大粒のダイヤがはめ込んである。

私は首輪を手に、洗面所へ向かった。鏡の前で服を脱ぎ、全裸になつてから、首輪を着けてみた。

ちよつとばかり緩いけど、思いのほか良く似合っていた。

鏡の中で微笑んでいる女は、もう野良ではなくなっていた。

だけど、野良でないというだけで、あの男が連れていた女達と比べると、綺麗でも若くもない、びっくりするような芸を持っているわけでもない、みすばらしい犬であることには違いなかった。

そう。私だってあの女達と同じく、誰かに愛されたがっている、ただの犬に違いなかったのだ。

【END】

（後書き）

読了くださった方に、絶大なる感謝を申しあげます。
ご感想、ご批評など、一言でも頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9266z/>

Collar

2011年12月28日23時46分発行